

究極の「エコライフ」を追求する 『日本型産業文明』を国家目標に

橋爪 大三郎 Interview with Daisaburo Hashizume

I 生活者としての「エコライフ」

うな後発工業国は高度成長。第三世界は横ばいでも、全体としては、かなりの成長になります。人口も増えるので、環境への負荷も増えるというのが世界の趨勢です。

先進国で、ちょっとくらいリサイクルしたからといって、少し「エコライフ」をしたからといって、この全体の趨勢は変わりません。現状では、先進国の気休めが「エコライフ」というのが、偽らざる実態なのです。

とはいえ「エコライフ」、すなわちエコロジーに配慮した生活を考えるのは、決して悪いことはありません。当然のこと、よいことです。「焼け石に水」かもしれないが、やらないよりましです。

本気になって「エコライフ」を実践しようと思うと、まず、増えすぎた人口を減らす必要があります。

子どもの人数をみると、日本では、一人の女性が生涯に産む子どもの人数が一・二九に下がったと先日発表がありました。台湾や韓国では、もっと下がっています。ヨーロッパも似た傾向にあり、先進国はどこでも子どもが減ってきています。先進国の一人当たりの資源消費量は、第三世界の五倍、一〇倍なので、先進国の人口が減れば、それだけ消費が減って、環境にやさしいことになります。まさしくこれは「エコライフ」なわけです。「エコライフ万歳」を言うなら、先進国の人口を減らさなくてはいけないということになります。

極端な話、先進国なんて一つか二つ消滅してしまえば、もったいないわけですが、でもそんな荒療治はできません。ではどうするかというと、先進国の人口が抑制されているのだから、第三世界から先進国へ人口移動が起こればいい。地球全体としてみると、これはいいことのはずです。つまり、移民を受け入れることです。

移民に関しては、たとえばアメリカには「移民法」があり、移民の受け入れに厳しいわけです。人口比では、オーストラリアの方がはるかに移民を受け入れています。ヨーロッパもそれなりに受け入れていますが、それでも移民を何の制限もなく受け入れてる国は、今のところどこにもありません。

今後「なぜ先進国は移民を受け入れないのか」という第三世界

必要だけれど簡単でない「エコライフ」

もともと人間は、環境に配慮して生活してきました。狩猟民族、遊牧民族、農耕民族、伝統社会を生きていく人びとはすべてそうです。昔はパワースイッチもなければ、蒸気機関もありません。何にもない状況下では、自然環境に圧倒されることがあっても、自然環境を破壊してしまうことはありませんでした。ところが工業が発展して、人間の活動が自然をスタボロにしようということが起こったわけです。そこで、環境を意識して生活する必要性が語られるようになりました。

このように、必要だけれども簡単でないのが、「エコライフ」だと言えます。なぜ、簡単でないのか。まず、人口という面から考えてみると、現在、地球上に約六五億人の人間がいますが、二〇世紀のはじめは約一五億人でした。わずかに一〇〇年の間に、四倍以上に増えてしまった。どうみても増えすぎです。そして、これだけ人間が増えてしまうと、伝統的な農耕や産業だけでは生きていけません。たとえば、人力による農業が主産業だった江戸時代には、日本の人口は三千万人。ところが産業化が進むと、一億二千万人に増えました。この現象は世界共通で、産業化が進むと、どこでも人口はだいたい四倍ぐらいに増えるのです。

そして、この増えた分は、工業が支えています。先進国の人口とは化石燃料を使い、自動車、飛行機を使い、化学肥料を使い、大都市に暮らし、第三次産業に従事し、高等教育を受け、コンピュータを使う。こういうライフスタイルは、高度産業文明のたまものです。しかも、消費性向というものがあつて、産業化によって増えた所得の七割から八割を消費に回す。つまり、産業が成長すればするほど、それだけ資源を使うことになります。先進国の経済成長は、だいたい横ばいから微増です。でも中国のよ

からの圧力が高まると思います。なぜなら先進国は、資源をどんどん輸入しているからです。「化石燃料や鉄鉱石や木材や一次産品を、先進国はほとんど受け入れているのに、なぜ移民はためなのか」という声が、大きくなるでしょう。

先進国の技術は消費も生み出す

先進国の科学技術。省エネ、ナノテク、生命科学などの新技術には、資源を節約する効果があります。しかし、新しい商品も生まれるので、資源を浪費する効果もあります。どちらが効いてくるか、わからないわけです。たとえば、昔の大型コンピュータと同じ性能のものが、値段が何万分の一に下がってパソコンになり、消費電力も小さくなった。省資源化ができたわけです。しかし販売台数が何百万倍にもなりました。また、昔はベーゴマやメンコで遊んでいた子どもが、今はプレステとかで遊んでいます。一家に一台ゲーム機があつて、どう考えても「エコライフ」の反対な生活なわけです。このように、資源を節約するはずの科学技術が、資源をより浪費するように作用してしまいます。

そんな中、「エコライフ」という、社会と調和した生活をしたという人びとの願いが本当にあるとして、それがちゃんと実現できるかどうか。一つの方法として考えられるのは、「エコライフ」を志向する人びとが集まって、地球にやさしい「エコビレッジ」、彼らだけのコミュニティを作るといふやり方です。

これは、やつてできないことはないが、うまく行かない。理由は、二つあります。第一に、子どもたちが不満を持つからです。親は自分で選択して、好きに暮らしているからいい。しかし、「エコライフ」を実践すると、所得が下がります。簡単に言うと、人なみの生活ができなくなり、

「エコライフ」という生活者価値

貧乏になるんです。そこで子どもが「そんなのは嫌だ」と、出ていってしまう可能性が高い。その結果、「エコビレッジ」には子どもがいなくなつて、結局、失敗してしまいます。

第二に、かりに子どもがとて聞きわけがよくて、「エコビレッジ」運動が大成したら、何が起こるのか。六五億人が都会から田舎へ行って「エコビレッジ」生活をはじめたとすると、食物が足りなくなり、先ほどのべたように、伝統農業では、地球上では一〇億人くらいしか養えない。「残りの五五億人には飢え死にしてください」という話になってしまう。工業なしに、現在の人口は養えないのです。

以上二つの理由で、「エコビレッジ」は、選ばれた人びとの運動になつてしまいます。一部の人びとにしかできない運動なのです。

社会システムとして「エコライフ」を追求

そうすると、政府や国際機関を巻き込んだ、社会システムの課題として「エコライフ」を追求するしかありません。

ここで、日本が果たす役割は大きいと、私は思います。その理由の第一は、食糧の問題です。

日本には日本食の伝統があります。日本人は一〇〇〇年以上動物性タンパクを食べないで生きてきました。日本の伝統的な食材である、豆腐、カマボコ、コンニャクなどは、健康食品でもあります。肉など動物を食べないで、その飼料である大豆やトウモロコシを食べる方が、地球にやさしいのは明らかです。

肉食には、問題がある。人間がかりに五億人ぐらいいないのなら、地球上には空き地もたくさんでき、そこに太陽が当たって、草がのびて、それを勝手に牛や羊が走り回って食べて、太ったところを殺して食べればいいので、とても効率がいい。でも、家畜を飼いにして、飼料作物を食べさせる肉食だと、非常に効率が悪い。肉を人間が食べるには、その何倍もの飼料がいるのですから、飼料を人間が食べた

採算が合うのは、大勢が集中して住んでいるからです。今、日本の家屋の多くは低層住宅ですが、これを集合住宅にしたら集積率がもつと上がつて、さらに効率がよくなります。こういう風に都市改造すれば、地球全体の資源効率はアップします。

伝統的に日本の家屋では、リビングルームとベッドルームが同じでして、ベッドで寝るようになると、リビングルームとベッドルームを別々にしなくてはなりません。余分に一部屋あるわけで、その分、効率が悪くなります。日本人は、狭い空間を有効に活用するための技術をもともとそなえていました。それを活かせばよいのです。

また、家屋の耐久年数を延ばす必要もあります。たとえば、東京の木造家屋の平均耐久年数は二〇年にもならないわけで、信じられないくらいに短い。これを二倍にしたら、価格は半分にになります。四倍にしたら、価格は半分になつたうえに面積が二倍になるかもしれません。生活の質が上がるわけです。だから住宅の耐久性を高めることは大事で、ヨーロッパではこれが政策の基本です。ヨーロッパの都市では、二〇〇年も経っている家屋はザラです。そのため低迷している面もありますが、しかし、生活コストは安いわけで、それが正常なのです。日本の伝統家屋は、木造でしたが、江戸時代は二〇〇年、三〇〇年もつていたので、長もちさせることはできるはずなんです。

日本型生活で資源効率を高める

第三が、勤勉の美意識があることです。

日本人は、働くことが美しく、働くことが人生の目的だという文化を持っています。多くの社会とは反対の意識です。多くの社会の人びとは「働くことが嫌で、かっこうが悪くて、遊ぶことが楽しい」と考えています。大金持ちが資源を浪費し、働く人が貧乏という階層社会になっていますし、貧乏人もたまたま金を手に入れると、パツと使つてしまいます。

方が、もつと多くの人間を養うことができます。

ところが、所得が上昇するにつれ、多くの国々はみな肉食に転向しています。これは非常に困つたことで、肉を食べない食事システムを開発しないとけません。ふつうの人びとは、肉なしの食事を「まずい」と思うかもしれません。しかし日本人は、肉を使わなくても美味しい料理を食べてきました。それを世界に広めていくことで、今は飼料作物すら満足に食べられない人でも、食べられるようになるはずなんです。

私の意見ですが、中でもコンニャクは、代替食品のチャンピオンです。たとえば、ビーフステーキとコンニャクを一箱に置いておくと、コンニャクにビーフステーキの味がうつります。「フエイク食品」を作るのにとってもいい。カロリーもないし、見た目も味もほとんど区別がつかないものを作れる。そこで、コンニャクを食べることを国策として、大々的に進めていきたいと思います。

人を都市に集める方が効率的

第二は、都市構造とライフスタイルの問題です。

東京と北京や上海を比べてみると、東京は集積力がとても高く、首都圏に三千万人ぐらいい住んでいます。しかも、一日にいくつもの約束を入れることができます。これは、東京の鉄道網が発達しているからで、移動が容易で、時間も正確です。でも、北京や上海では困難です。主な移動の手段はバスですが、何回も乗り換えて時間がかかるうえに、時間も不正確です。待ち合わせの時間に着こうと思つたら、余裕を見て出なければならず、効率が悪い。

アメリカも、日本より資源効率が倍ぐらいい悪いのですが、それは、自動車文明だからです。土地があつても、都会に集中して住んだ方が、効率はいい。日本は山が多いので、七割が都市に集中しています。そして首都圏と関西圏を中心に、鉄道網が発達しています。鉄道の

日本人は、もともと貯蓄性向も高い民族です。貯蓄性向が高ければ、消費性向が低いので、資源の節約になります。

このように、アメリカ的生活様式に代わる、日本式生活様式を世界に普及させることが有効なのです。「慎ましいが、美しく、心豊かな生き方、これはまさに「エコライフ」そのものです。

日本では、つい最近まで、これを実践してきました。しかし今は、アメリカ風になつてきていますから、そこをグッと踏みとどまって、日本的な生活を続ける必要があります。自動車にしても、日本車はアメリカ車の半分の燃費で走ります。そういうところを活かして、究極の「エコライフ」を追求する『日本型産業文明』を作る。そして、これを国家目標にして技術開発を進めていく。これができるれば世界に貢献できるわけです。

資源効率が二倍になれば、先進国並みの生活ができる人数が二倍になるわけです。素晴らしいことだと思いませんか。今、一〇億人が先進国並みの暮らしをしているのでしたら、それが二〇億人になります。同じ資源でこれだけの効果があるわけです。

こうした大胆な社会改造こそが、「エコライフ」の本当の意味だと、私は思います。

(本稿は橋爪大三郎氏へのインタビューをもとにCEL編集室がまとめたものです)

◎橋爪 大三郎(はしづめ だいさぶろう)

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授、社会学者。一九四八年神奈川県生まれ。七一年東京大学文学部社会学科卒業。七四年同大学院社会学研究科修士課程修了。七七年同博士課程単位取得退学。八九年東京工業大学工学部助教授、九五年同教授、九六年より現職。著書は、「科学技術は地球を救えるか」(共著、富士通フックス)、「言語/性/権力」橋爪大三郎社会学論集(春秋社)、「人間にとって法とは何か」(PHP新書)、「心」はあのか(文)くま新書など。